

2020年11月30日

独立行政法人 大学入試センター 理事長 山本 廣基 殿

高等学校ドイツ語教育研究会 会長 能登 慶和
日本独文学会 ドイツ語教育部会長 太田 達也

大学入学共通テストにおける外国語科目の取り扱いに関する要望書

グローバル化が一段と加速する昨今、日本においても多くの外国人労働者あるいは外国籍を持つ児童・生徒が増えていく中で、私たち高等学校ドイツ語教育研究会および日本独文学会ドイツ語教育部会の会員は、教育や研究を通してドイツ語やドイツ語圏の言語・文化を伝え、自分たちとは異なる背景を持つ人々との相互理解および平和的共存を可能とするための人材育成に注力しております。

そのような最中、11月6日付の読売新聞において、2025年度以降の大学入試共通テスト出題科目の「スリム化模索」なる見出しで、現行の英語・ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語による5言語の外国語科目のうち、英語以外の科目については例年の受験者数が少ないため将来的な検討の必要性があるとして大学入試センターが「削減を示唆した」という報道がなされました。この報道の真偽は定かではありませんが、仮に事実だとすると、ドイツ語（あるいはその他の外国語）教育という現場に直接携わっている私たちにとっては非常に困惑する内容であり、また、到底受容することもできないものであります。

上述の通り、我が国の外国人労働者の数は年々増加の傾向にあり、先の改正出入国管理法によって今後は一層多くの外国人が日本を拠点とすることになると考えられ、それに伴って日本国籍を持たない児童および生徒数の増加も加速することが見込まれます。一方で、既に日本の学校に在籍する外国籍の児童・生徒のうち、英語を母語とする児童・生徒の割合はわずか3%とも言われています。つまり、現状においてもそれほど多種多様な外国籍の人々が日本で生活しているということになります。このことを考慮すると、高等教育以前の中等教育、ひいては初等教育においても英語以外の複数外国語に触れることは、加速度的に多言語社会へと変容しつつある日本において多様な人々と平和的に共生していくうえで、一つの重要な契機となるはずで

現在の中等教育においては、ドイツ語も含め比較的多くの学校で英語以外の外国語科目が設置されており、また、実際にそれらの科目を受験科目として選び進学を目指す生徒も少なくありません。大学入試センター試験あるいは大学入学共通テストは、まさにそのような生徒にとっての登竜門であります。確かに、英語と比して他の外国語における受験者数の少なさは顕著であるかもしれませんが。しかしながら、「受験者数が少ないから」という理由で

外国語の受験科目が狭められることになれば、受験科目にないという理由で、学びたい言語の学習を諦めたり、他の科目の学習を優先させねばならない事態が生じるかもしれません。そのようにして、生徒が学びたい言語の学習機会を逸することになってしまうならば、日本の今後の成長にとっても損失と考えられます。

平成 28 (2016) 年度の中央教育審議会答申では、グローバル化時代における英語以外の外国語教育の必要性について、「言語やその背景にある文化の多様性を尊重することにつながる」と記されています。さらに言えば、文部科学省も外国語教育の抜本的強化に取り入れた『ヨーロッパ言語共通参照枠』(CEFR) の基本的な理念のひとつである複言語・複文化主義は、母語以外に複数の言語を学ぶことにより自文化の相対化と他者に対する寛容性を促進し、民主的市民性に基づく平和的な共生社会の構築に寄与することにつながるという考えを基盤としています。実際、初等・中等教育において複数言語教育を実践している学校では大きな成果が報告されており、今後ますますこうした取り組みが拡大されることが期待されます。こうした事情に鑑みると、大学入学共通テストにおける外国語科目においても、複数の外国語において受験可能である現在の体制を維持することは、多様な人々との対話を通して協力できる人を育てるうえできわめて重要であると、私たちは考えます。そしてこれらのことは、受験する外国語科目としてドイツ語を選択し、大学入試センター試験や各大学作成の入学試験を経て、現在は社会人として活躍している卒業生から私たちのもとに寄せられた声(添付資料をご参照下さい)からも、十分にその成果を見て取ることができます。

以上のような観点から、将来有望な若い世代の多様な学びの機会を保障するためにも、大学入試センターにおかれましては今後も外国語 5 言語による入試を継続的に実施していただきたく、ここにお願い申し上げます。

能登慶和 (署名)

太田達也 (署名)

(添付資料：卒業生の声)

—ドイツ語受験という選択肢のお陰で、10代半ばから英語圏以外の異文化、言語への新たな認識を広げることができました。現在海外の同僚と仕事をする上でも当時の学びは活かされており、学力を測る第一外国語は英語のみ、と画一化してしまうのは、多様性が求められる現代社会に対しての矛盾であり、それ以外の言語への特性を持つ学生の可能性を狭めることにほかならないのではないのでしょうか。

—ドイツ語受験をしたうちの1つに、英語への苦手意識があった身としては、ドイツ語を学ぶことで、点数だけではない語学習得の楽しさを学ぶことができました。ドイツ語受験で英語以外の外国語を学んだことをきっかけに、英語へも取り組む意欲が湧き、現在の仕事ではドイツ語と英語の両方を使用しています。インターナショナルな人材への需要が高まる中、受験時に英語のみという選択肢は少なすぎるとするのが個人的な意見です。

—元々「海外は怖い、日本は安全」という固定観念を持っていたのですが、ドイツ語の授業や語学留学を通じて海外に興味を湧き、大学では英語で論文を執筆し海外で学会発表を行うなど、積極的に対外交流を行いたいという志向に変わっていきました。ドイツ語受験が廃止されると、ドイツ語の履修を取りやめる学校が出てくると思います。海外に触れる機会を絶やさないためにも、ドイツ語受験を継続して頂きたいです。

—私は、英語は近いうちに使えることが当たり前になる時代がくるということを知っていたため、英語ではない言語を学びたいと思い、第二外国語が学べる高校、そして、ドイツ語受験を選びました。現在もドイツ語、英語の学習を続けていますが、そこで感じることは、英語に関しては、豊富な参考書、レッスンがあり、いつからでも、独学でも学習ができますが、ドイツ語に関しては、熱心な先生方のもと、高校で受験科目として必死に勉強したからこそ、今の知識があると感じています。今思うとかなり恵まれた環境でした。思い立った時に学べる環境、その強みを受け入れてくれる環境が整っていたからこそ今の自分があると思います。ドイツ語受験の廃止は、学生の意欲を削ぎ、可能性を狭めるものだと思います。

—もともと英語で挫折しかけていたところ始めたドイツ語学習ですが、ドイツ語の歴史そのものに興味を持つようになり、それが大学での専攻を決めるきっかけとなりました。第二外国語受験の廃止によって、学習者のきっかけになり得る可能性を摘んでしまうのは、非常にもったいないことだと感じます。

—法律事務所での勤務にて、例えば外国法は、その国の言葉が分からないと調べることが非

常に難しいと実感しております。第二外国語は、新たな市場を開拓する力を持っています。大学に入ってから第二外国語を学んだという話はよく聞きますが、そこで学んだことを「覚えていない」という人が大半です。大学受験という目標に向かって高校時代に学ぶことによって、しっかりとした力がつきました。各大学のみでの第二外国語受験だけでは難易度等にも大きな波があります。センター試験で選択できることに大きな意義があります。センター試験は社会的に大きな役割を持っているからこそ、個々の特性にも着目した第二外国語受験をぜひこれからも継続していただきたいです。

一高校でドイツ語を学んだことにより、様々な世代、そして国内外のドイツ語学習者と交流することができました。そこで出会った人たちから、学びの姿勢に刺激を受けただけでなく、様々な文化や習慣を知ることができました。さらに、英語以外の外国語(ドイツ語)を学び、それぞれの言語の比較ができたことで、私たちの母語である日本語についても、より深く考えることができたと思います。「いつも使っている言葉が、外国語ではどのような言い回しになるのか？」外国語に興味を持ち、勉強したからこそ、日本語の語彙を増やすことや、相手に話す・伝える力を培うことができたのではないかと考えます。現在、私は高校・大学で学んでいたドイツ語を使う仕事には就いていませんが、あの時にドイツ語を勉強し、異言語でコミュニケーションをとる経験が、社会人になった今、別の形でしっかり活きていると思います。仕事の際、難しい内容をわかりやすく表現したい時、説得力のある伝え方をしたい時、外国語学習は言葉の引き出しを自然と増やしてくれていたことを日々実感しています。英語以外の外国語の受験を廃止することは、海外の言語や文化に興味を持つ高校生の可能性だけでなく、彼らの視野や世界を確実に狭めてしまうと思います。なぜなら外国語を学ぶことは、日本にいて日本語で表現される言葉に囲まれているだけでは、絶対に会えることのできない世界を経験できると考えるからです。特に、10代のうちに英語以外の言語を学び、文化に触れたことで、私は自分自身の考えの幅を広げることができました。だからこそ、英語以外の外国語受験を廃止せず、継続してほしいと強く思います。